

PROGRAM NOTES

柿沼 唯 (作曲家) Yui Kakinuma

J. パッヘルベル (1653-1706)

カノン ニ長調

ヨハン・パッヘルベルはバロック中期を代表するオルガニスト。多数のオルガン曲が残されているが、3つのヴァイオリンと通奏低音のために書かれたこの〈カノン〉は、今日もとても親しまれている。低音の反復音型の上に、3声のカノンが展開する。

W.A. モーツァルト (1756-1791)

ディヴェルティメント ニ長調 K.136

「ディヴェルティメント」とは、イタリア語の"divertire (楽しませる)"に由来する曲名で、モーツァルトが生まれ育ったザルツブルクではポピュラーなジャンルだった。それは主に社交を盛り上げる目的で書かれた音楽で、野外や広間で、その場に応じて様々な編成で演奏された。モーツァルトは全部で20曲の〈ディヴェルティメント〉を残しているが、20曲のうち9曲が管楽器用、7曲が管弦楽用、そして4曲が弦楽器用に使われている。このニ長調のディヴェルティメントは、1771年末にイタリア旅行から帰郷したモーツァルトが作曲した3曲の弦楽器用ディヴェルティメントの中の一つ。セレナード〈アイネ・クライネ・ナハト・ムジーク〉と並んで広く親しまれている。

- 第1楽章 アレグロ
- 第2楽章 アンダンテ
- 第3楽章 プレスト

交響曲第29番 イ長調 K.201

モーツァルトの交響曲の半数以上は、彼がまだ10代の頃にヨーロッパ各地で学んだ様々なスタイルから影響を受けて書かれたものであり、彼の真の個性が開くのは1778年、22歳の時に書かれた〈パリ交響曲〉からといわれている。この〈第29番〉はその4年前、1774年に作曲されたものだが、〈「小」ト短調交響曲〉の名で呼ばれる〈第25番〉と並んで、初期の交響曲を代表する傑作として名高い。弦楽器群にオーボエとホルンを2本ずつ加えた小規模な編成ながら、深い内容と確固とした構成、そして入念な書法はとりわけ印象的だ。その緊張感みなぎるスタイルは、ヨーゼフ・ハイドンの弟、ミハエル・ハイドンからの影響といわれている。

- 第1楽章 アレグロ・モデラート
- 第2楽章 アンダンテ
- 第3楽章 メヌエット
- 第4楽章 アレグロ・コン・ス皮ーリト

A. ヴィヴァルディ (1678-1741)

四季 - ヴァイオリン協奏曲 へ短調「冬」 Op. 8, No. 4, RV 297

アントニオ・ヴィヴァルディのおびただしい数の作品（その数は450曲とも550曲とも言われる）の大部分は、様々な楽器のための協奏曲で占められている。これらは当時のヨーロッパで一世を風靡し、そのスタイルは「ヴィヴァルディ・タイプ」の名で、多く作曲家にも多大な影響を与えた。中でも、バッハがヴィヴァルディの作品を熱心に研究したことはよく知られている。

今日最もポピュラーな〈四季〉は、1725年に出版された彼の5番目の協奏曲集「和声と創意への試み」の第1曲から第4曲に収められた4曲のヴァイオリン協奏曲で構成される。いわゆる「標題音楽」の代表例として広く知られる作品であり、各曲には、「春」「夏」「秋」「冬」の標題とともに、四季の自然と人々の営みを歌った作者不詳のソネットが添えられ、音楽はその詩の情景にあわせて進められる。今回は、「冬」の標題をもつ第4曲へ短調が演奏される。

- 第1楽章 アレグロ・ノン・モルト 「冷たい雪の中の凍てつく寒さ、吹きすさぶ寒風に、足踏みしながら寒さに歯の根が合わない」
- 第2楽章 ラルゴ 「炉端では静かに満ち足りているが、戸外は冷たい雨が降っている」
- 第3楽章 アレグロ 「氷の上を注意深く歩いて行く。乱暴に歩いて転ぶと、今度は急いで立ち上がり走り出す。南風、北風、あらゆる風が戦っているのを聞く。これが冬なのだ。しかし冬は喜びをもたらす」

J. ハイドン (1732-1809)

交響曲第45番 嬰へ短調「告别」 Hob. I-45

古典派交響曲の様式を確立したヨーゼフ・ハイドンは、生涯に100曲以上の交響曲を残した。各曲には様々な作風の変遷が見られるが、そうした様式的な特徴とは別に、面白い趣向がついていることで広く知られるのが、この〈第45番〉である。1772年、エステルハーゼ侯爵家の楽団の楽長時代に書かれたこの交響曲は、曲の最後に、演奏している楽員が一人、また一人と演奏を終えて退場していき、最後に二人のヴァイオリン奏者だけが残るといふもの。エステルハーゼ侯爵がハンガリーの片田舎に建てたお気に入りの宮殿にあまりに長く滞在するので、同行しなければならぬ楽員たちの不満を聞いてハイドンは、待遇改善の要求をこの曲で行ったのだった。当時としては珍しい嬰へ短調という調性も、寂しい気分を出すために採られたものであり、そのためエステルハーゼの鍛冶屋は新しいホルンを作らなければならなかった、というエピソードも伝えられている。

- 第1楽章 アレグロ・アツサイ
- 第2楽章 アダージョ
- 第3楽章 メヌエット (アレグレット)
- 第4楽章 プレストーアダージョ